オシャレ・ライダー　ver2

スグル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オシャレ・ライダー　ｖｅｒ２

【Ｎコード】
Ｎ６７９６Ｄ

【作者名】
スグル

【あらすじ】
着ている服によって、人格が変わるオシャレ多重人格少女、越島ジェリのハッピー（？）で、キュート（？）なライフ。

『チョコレートと、ハッピーは甘いものでしょ』（前書き）

この作品は、かなりの実験作です。内容については、寛大な目で見て上げてください…。

『チョコレートと、ハッピーは甘いものでしょ』

西暦２００８年の二月…。
今、再び、オシャレに命をかけたつもりでいる暇な人々の激しく切ない戦いが始まる…。

ここは、Ｓ県にある『キャンディーキューティー刑務所』…。
その殺風景な出口から出て、刑務所内で世話になった看取たちに、挨拶をして、出所する一人の少女がいた…。
彼女の名は、越島ジェリ（無職、前科あり）。オシャレに命を預けたが故に、悲しい運命（自業自得）を辿った少女である。
刑務所内で着れなかった、お気に入りの黒のゴスロリファッションに、着替え、ウキウキの気分で彼女は街を歩く。
「まぁ、昔のことは忘れて…、これからを楽しく生きていくわ！」
と、前向きに決意を新たにした瞬間！！
彼女の周りで、いきなりにもほどがあるだろう！的なまでの事件が発生した！！

バァーーン！！！

「きゃあ！！」
裂くような強烈な銃声の音が、彼女の耳に入り込む。
なにがあったのだ！？と、彼女の目線は、銃声が鳴った先に走る。
目線の先には、コンビニがあった。どうやら、銃声が鳴ったのは、このコンビニのようだ。
「一体、なにが…」
彼女の脳裏に、嫌な想像が沸く…。
（あっ、月曜日が休日だと、ジャ○プは土曜日に発売になるんだ…）

コンビニを見ると、週刊誌が第一に頭に出るのは、人として生きる者の悲しい性なのだろうか…。

彼女は野次馬と、パトカーが囲む現場近くに駆け寄った。
そして、一部始終を知るべく、たまたま近くに居た、野次馬の青年、黒鮪黒陰（某料理学校講師、生まれた暦と、彼女どころか、友達居ない暦が同じ）に話し掛けた。
「そこの、友達居ないのを他人のせいにして、自分を正当化してそうな人！」
「ひっ！」
と、かなり失礼な話し掛け方を彼女はした。
「一体、なにが起きたですか…？ガン〇ムによる、武力介入？黒の騎〇団？」
「いや、違いますよ…。この２４時間営業のコンビニエンスストアー、『チェンジ・キックホッパー・パンチホッパー』に、本物の銃を持った強盗が…」
ジェリは、自分の顔に手を当てて驚く。
「まぁ！２４時間営業のコンビニエンスストアー、『チェンジ・キックホッパー・パンチホッパー』に、本物の銃を持った強盗が！！」
すると、彼女の驚きに合わせて、黒鮪黒陰が更に説明をする。
「強盗の名前は、オシャレ大学卒業の『エンドレス・ラバーズ・レイン・コンピューターシティー・玉雄』で、人質になっているのは、『チェンジ・キックホッパー・パンチホッパー』の店長、『クライマックスＢＯＹ・オレ・ヨウヤク・サンジョウ』です」
ジェリは、また驚く。
なんと、前回と同じく、憧れのオシャレ大学の卒業生による見るも恥ずかしい事件だったのだ。
更に、何故か、事情に詳しい黒鮪黒陰が説明をする。
「犯人の『エンドレス・サマーズ・レイン・コンピューターシティ

ー・玉雄』は…」
ジェリは、黒鮪黒陰が名前を間違えたのに気付いた。ツッコもうとしたが、めんどくさかったし、別に会話を広げたいわけもないから、やめた。
「オシャレ大学、ブリタニア文化学部卒業の芸能人志望の真面目な青年でした…」
黒鮪黒陰の『エンドレス・ラバーズ・レイン・コンピューターシティー・玉雄』が強盗になった理由の説明が、約二時間くらい続いたが、短く簡単に要約すると、『芸能人になれなくて、やさぐれて、たまたま落ちていた拳銃を拾ったので、それで近くにあったコンビニで強盗をすることにした』ということであった。
ちなみに、この二時間の間に、強盗の銃が、さっきの威嚇で宙に撃った1発しかなかったのが判明した瞬間、警察の武力介入により事件は解決した。
やはり、日本の警察は、あなどれないと黒鮪黒陰の説明を聞き流しながら、ジェリは思った。

こうして、彼女は、また歩み始めた。

『チョコレートと、ハッピーは甘いものでしょ』（後書き）

久方ぶりの連載です。長い間、スランプ状態に陥っていたので、これから、徐々に調子を戻しながら、執筆して行こうと思います。

『でも負けないもん、オシャレもするもん、君が居るから』

S県在住の越島ジェリは、無職、二十歳のオシャレ好きの少女である！

彼女は、身につけるファッションの種類と用途によって、性格、顔つき、髪型、オーラ等が、露骨に変わる多重人格少女なのだ！！

ちなみに、なにも着てない時（ようするに全裸）や、下着だけの時はどうなるかは、よい子の想像力に任せる。

果たして、今宵の彼女のファッションは…。

本日のジェリは、お気に入りのゴスロリファッションに身を包み、ランランルンルンと街中を歩いていた。彼女が向かっているのは、自動車の教習所、『鏡の中のマリオネット・自動車教習所』である。

なんと、彼女は車の免許を取ろうとしているのだ。

教習所内は、就活、受験等が終わり、一段落ついた高校生、大学生たちでイッパイだ。

オートマチック限定で教習を始めたジェリ。そして、今日は初めて車を運転するのである。

「ああー、緊張するわ…」

すると、近くにいた女子高生達のこそこそ話が、ジェリの耳に入ってきた。

「ねぇ、知ってる？ここに、セクハラしてくるキモイ、バーコード頭のおっさんの教官が居るんだってー」

「マジでー」

ジェリは、その会話に耳を傾ける。

「なんでも、その教官は、女の子の教習生に、あんなことや、こん

なことしたり、ミ〇ズ肉のハンバーガーの都市伝説を、的を得た説得力でデマだと批判するのよ」
「マジでー、最悪、キモイー」
と、この教習所にセクハラを働く悪質な教官が居ることを話していた。
「その教官の名前は、『デイブレイズ・ベル・マコト』だって」
教官の名前を聞いて、ジェリはギョッ！とした。
なんと、今日のジェリの教習を担当する教官の名前であった。
（ええーっ、初めての教習が、セクハラ教官ですって！）
ジェリの脳裏に、あんなことや、こんなことをされたり、的確な証言で、ミ〇ズ肉のハンバーガーの都市伝説を否定される自分の姿が浮かぶ。
（なんとかしなきゃ！！）
ジェリはカバンを持って、トイレに向かって行った。

そして、運命の教習の時間になった。
教習コースの待機スペースに、デイブレイズ・ベル・マコト教官が、残り少ない髪の毛を冬の風になびかせ、鼻歌を歌いながら向かっている。
「ああ、プラスチックみたいな恋だー♪」
かなり教官の気分が良かった。彼は、教習名簿のジェリの顔写真を見て、にやけていた。
「いやー、今日の担当の娘は、かなり可愛いぞー。よし、今日もあんなことや、こんなことをしたり、ミ〇ズバーガー説を否定してやるぞ！！」
そう意気込んでいた。

「えーと、参号車の越島ジェリさん、居ますかぁー」

待機スペースに到着した教官は、ジェリの名を呼ぶ。
「はい…」
そして、ベンチに座って待つ教習生達の中から、ジェリは、手を挙げて立ち上がった。木刀を片手に、サラシを胸腹に巻き、オールバックの髪型で凶悪な顔つきをした特効服姿で…。

説明しよう！
越島ジェリは特効服姿になると、凶悪なレディース暴走族の性格になるのだ！
この変貌を、例えるなら、クラスメイトの純情そうな女の子の首もとに、夏休み明け、絆創膏が貼られているようなものである！！

「誰だ、貴様はぁ！！？」
デイブレイズ・ベル・マコト教官は名簿の顔写真と違いすぎるジェリの姿に絶望した。
セクハラされないように、特効服姿に着替え、可愛らしさが消えたジェリの体からは、殺意のオーラがほとばしる。
「夜露死苦…」
レディース・ジェリは、挨拶をした。

「私が、ガ〇ダムだ…」
レディース・ジェリは教習車の運転席に、シートベルトをしながら、わけのわからない台詞を言って座った。ちなみに、後部座席には、木刀を置いている。
補助席には、デイブレイズ・ベル・マコト教官が震えながら座っていた。
（話が違う…。話が…）

と、殺意漂うジェリに教官は恐怖していた。
そんな教官を睨み付け、ジェリは…。
「おい、コラ、このオレンジ・サワー！どうやって、動かすじゃ！！」
変なあだ名を付けて、教官に吠える。
こうして、悪夢の教習が始まった…。

「まずは、ブレーキを踏んで…」
と、教官は一応、指導を始めた。
エンジンが始動し、ブルルン！と音が鳴った。
「タイヤが動かねぇじゃねぇか！！このノーパン・スタイリストが！」
凶悪な性格のレディース・ジェリは、些細なことで怒りまくった…。

「なんで、このハンドル、ベタベタすんじゃ、この脱脂されてない脱脂綿が！！」
「スピード、出ねぇじゃねぇか！この甲子園志望のサッカー少年！！」
「ミラー見にくいんじゃ、この悲しみの王子、ロボライダー！！！」
「なんで、ドラマ版のハ〇ク〇は原作ぶち壊しなんじゃあ、このサランラップを、ゴミに出すときの分別のめんどくささが！！（確か、ケースは燃えるゴミ、刃は燃えないゴミ、芯はリサイクル。間違っていたら、すみません…。ｂｙ作者）」
事あるごとに、レディース・ジェリは、デイブレイズ・ベル・マコトに罵声を浴びせた。
こうやって罵声を浴びせ続ければ、きっと、彼は、二度とセクハラ行為が出来なくなる…、と考えてのレディース・ジェリの行動で

ある。
　しかし、レディース・ジェリは、予想外の事態が起きていたことに気付いていなかった…。
「この、最近の少年週刊誌にある『勝○・○情・努○』の一つも見当たらない無駄に露出の多い漫画共が！！」
　レディース・ジェリは最大級の罵声を、デイブレイズ・ベル・マコトに浴びせた。
　しかし…。
（きっ、気持ちいい…）
　デイブレイズ・ベル・マコトは罵声を浴びる快感を知ってしまった…。セクハラする快感より、罵声を浴びる快感に目覚めた…。
　この日以来、デイブレイズ・ベル・マコトのセクハラ行為はなくなった。

　こうして、ジェリは人知れず、世界を正しい道に導いた。
　しかし、彼女は思う。
『なんで、教習所の教官って、あんな怒りっぽいんだろう…』
　と…。
　ちなみに、彼女は、仮免試験で、エンストしないオートマチック車でエンストを起こして、免許取得ならずだった。

『でも負けないもん、オシャレもするもん、君が居るから』（後書き）

越島ジェリの人格その１　レディース・ジェリ：狂暴。キレやすい。ドＳ。愛車、カワサキＺ４００ＦＸ。過去に伝説がある男に対しては、デレデレになる。

『あの日から、僕の心にも、変わらない大切なものが』（前書き）

正直、この話は、一人ツッコミみたいな感じで書いてて辛かった…。

『あの日から、僕の心にも、変わらない大切なものが』

『グライダー博士の観察してみよう！！』

このコーナーは、カラオケで歌う曲の大半が、何故か、アニメのタイアップ曲になってしまうグライダー博士が、身近にあるものをキモイくらいに観察するよ。

博士

「やぁ、みんな！今日は、一人の少女の一日を観察をしてみよう」

S県K市の駅近くにある、今崩れても、誰も文句言わなそうなくらいにボロボロのアパート、『アパート・スタンリー・スカイ』。

昼下がりの太陽が、アパートのボロさを際立たせる。ここが、ジェリの住み家である。

彼女の部屋は、オシャレな雑貨や、オシャレな雑誌、オシャレなポスター、オシャレにも程があるだろう的なまでに、オシャレまみれだった。

そんなオシャレまみれな部屋で、ジェリは、いつものゴスロリファッションで自分の財布を開けてみる。

財布の中には、金はないが、いろんなお店のポイントカードが入っていた。

いきつけの服屋、『ショセン』のポイントカードと、有名ブランド店、『コノヨハ』のポイントカード、そして、レンタルビデオ屋、『ジャクニクキョウショク』の会員カードや、キャッシュカードしか入っていなかった。

彼女は金欠だった。

大きくため息を吐く。

「さすがに、これでは生活出来ないし、趣味のパチンコ、麻雀、賭博も出ないわね」
これを、キッカケに彼女はバイトをすることを決めた。

博士
「見て御覧。彼女の趣味のほとんどが、ギャンブルだねー。しかも、アルバイトする理由の大半が、ギャンブルするためと来た。これは、半端じゃないぜ。ここで、アドバイス。『賭けていいのは、賭ける覚悟のある者だけだ！』だよ！みんな、勝ち目のないギャンブルはやめようね！」

そう決意した彼女は、リクルートスーツに着替え、眼鏡を装着し、髪の毛を後ろに束ねた。そして、片手には求人誌。

説明しよう！
越島ジェリは、眼鏡、リクルートスーツに着替えることにより、頭脳明快で、計算高く、冷静沈着なインテリ天才少女になるのだ。

「アルバイトを決めるには、仕事の内容が時給に伴っているか、職場の人間関係が良いか、自分のスケジュールを崩す事の無いシフトを組めるか、また、働くことによって、学べることはなにかを、配慮しなければなりません」
そう言って、彼女は求人誌を開き、１ページずつ、様々な募集先に目を通す。
「このバイト先は、ダメね！夜中に働くなんて、肌荒れのもと」
こんな感じで、彼女は切り捨てていく。こうして、自分の理想に合うバイト先を決めるつもりのようだ。
「これもダメ！肉体労働なんて嫌」
「これも！腱鞘炎になるわ！」
「接客は、めんどいから、ダメ！」

「人付き合い、めんどいから、これもダメ！」
と、厳しくチェックして、バッサバッサと、ページをめくりながら、合わない求人先は切り捨てて行った。

博士
「志久雄真実以上に、自己中身だね。ここで、アドバイス、ガンダム３の歌詞にもあるように『人は一人では生きていけない』だよ」

そして、３０分後。
インテリ・ジェリは、一つの結論に達した。

『働かない方がいいや』

結局、求人誌を半分くらい読んでからの結論だった…。
ちなみに、次の日、親からの仕送りが来たそうな…。

博士
「ここで、アドバイス、『働かざる者、食うべからず』だよ。みんなも、こんな風にならないように、努力しようね！また来週！！」

『あの日から、僕の心にも、変わらない大切なものが』（後書き）

越島ジェリの人格その２　インテリ・ジェリ：頭脳派、冷静沈着、苦労よりも楽を選ぶ。

『世界中を壊しても、砕けないほどの愛が』（前書き）

この話に登場するエビフライ伯爵こと、吉崎孝則は、作者が過去に執筆した『えびふらい』、『えびふらい２』の主人公。そして、今回の話は、『えびふらい２』から、一年数か月後の話…。

『世界中を壊しても、砕けないほどの愛が』

「出たな！エビフライ伯爵め！」
五人の赤、青、緑、黄、桃色のボディスーツ達が、断崖絶壁を前に叫んでいる。
断崖絶壁の上には、やけにリアルなエビの頭の形をしたマスクを被ったタキシードを着た男、その名も、エビフライ伯爵の姿が。
「ふはは！よく現れたぞ！カケラレンジャー！！」
と、エビフライ伯爵が笑う。

そう、これは日曜朝放送の人気特撮ドラマ番組、『モザイク戦隊カケラレンジャー』のスタジオでの収録光景である。
番組主演者たちのほとんどがイケメンの美男美女ばかりであるため、現在のイケメンブームも手伝い、この番組の視聴率は鰻登りであった。
そして、この番組で忘れてならないのが、影の人気者。悪役のエビフライ伯爵である。
『山登り戦隊ヤマレンジャー』、『骨折戦隊ギブスシテンジャー』、そして、今作、『モザイク戦隊カケラレンジャー』と三年連続で主演している名物キャラであった。
このエビフライ伯爵を演じている吉崎孝則、２７歳の妻子持ちは、数々の下積みの経験をしたが、そのエビフライ伯爵での演技力を認められ、今では、多くの映画、ドラマに脇役としてだが主演。もちろん、本人の夢であったエビフライ伯爵としてでなく、吉崎孝則本人としての主演である。
周囲からは、これからが期待される役者として注目を集めている。
まさに、すべてが順調に行っている彼だが…。

「カット！」
「お疲れさまですー！」
収録終了後、吉崎はマスクを脱ぎ、大きく息を吐いた。そして、スタッフから渡されたペットボトルの水をゴクゴクと飲んでいた。
すると…。
「ＨＥＹ、ミスター・吉崎…」
この番組の監督で、長い付き合いのトミユキ・ヨシノ監督が彼に声をかけた。
「あっ、監督、お疲れさまですー！」
と、吉崎は監督の方に体を向け、挨拶をするが、監督は渋い顔をしていた。
長い付き合いである監督のいつもと違う表情に、吉崎は気付いた。
「どうかしましたか？」
そう吉崎が言うと…。
「ＹＯＵは、ＮＯＷ、売れてきているＹＯだね…」
監督は、自分の口に手を当てて言う。
「あっ、はい、おかげさまで」
ヘラヘラとした表情で、吉崎が笑う。
そんな彼の表情を見て、監督の眼光が鋭くなった。
「ＨＥＹ！ＹＯＵ！なんだい、その緩み切ったフェイスは！！」
スタジオ中に響き渡る大声で、監督は叫んだ。
いきなりの激怒に、吉崎は目を大きく見開いて驚く。彼だけでなく、周りにいた主演者、スタッフの皆が驚いた。
「最近のＹＯＵのエビフライ伯爵には、『ソウル』がナッシング！！」
『ソウル』と言われて、吉崎は韓国を思い浮べたが、どうやら、『魂』の方の『ソウル』のようだ。
「エビフライ伯爵は、ワールド征服を狙うためなら、ドゥーイングをセレクトしないデビルなんだＹＯ！！ファーストの頃のエビフラ

イ伯爵には、そのデビルのソウルがあった！！しかし、バッド！！ＮＯＷのＹＯＵには、そのデビルのソウルが、まったく、ナッシング！！ＮＯＷは、エビフライ伯爵じゃなく、ただのえびにエッグを浸して、パン粉を塗し、オイルでフライにした伯爵だＹＯ！！」

と、監督からの厳しい指摘をもらった吉崎はフラフラと家路を歩いていた。

彼は、かなり落ち込んでいた。監督からの厳しい指摘に落ち込んでいるのでなく、言われたことすべてが、最近、自分が感じていたことだからだ。

（監督の言うとおりだ…。最近、エビフライ伯爵をやっても、どこかしっくりこない…。孤独な悪役、エビフライ伯爵なのに、その孤独さが、表現出来ない…）

今の彼は、満たされている。だから、今の自分が孤独を表現するのが難しかった。

過去に苦労が多かった者が、いざ幸せを得ると、無意識に自分の心のコントロールが難しくなってしまう…。今の吉崎は、まさにそれだった。

（最初の頃、エビフライ伯爵しか役がなかったし、身の回りの環境もひどかった…。あの頃の俺には、孤独の中でもがく、ガムシャラさと、粗さがあり、それが役に反映されていた…。あの頃のエビフライ伯爵は、邪悪だが、人知れず自分の孤独に涙を流す怪人、エビフライ伯爵だった…）

過去の彼にとって、エビフライ伯爵は嫌な役でしかなかったが、本当の幸せをくれた役であり、いい意味でも、悪い意味でも、もう一人の自分である。そのエビフライ伯爵を表現出来ないのは、自分を否定しているような気持ちであった。

今のかけがえのない家族を手離すことは出来ない。しかし、もう孤独がわからなくなった今の自分は、過去の自分であるエビフライ

伯爵を表現出来ずにいる。
今、抱えている矛盾に悩みながら、家路を歩いている。今の彼には、街のネオンが眩しすぎる。

家路の途中にある、ライトが二つしかない暗い公園。そのブランコに、吉崎は腰を掛ける。
そして、缶コーヒーを飲み、ため息を吐いていた。
すると…。
「どうしたのですか？お兄さん？」
「！」
いつのまにか、目の前に現れたゴスロリ服の少女に話し掛けられ、吉崎は驚く。
「誰だい、君は！」
「越島ジェリと言います」
吉崎の前に現れたのは、我らの多重人格少女、越島ジェリである。なぜか、彼女は公園に居た。
「お兄さん、なにか悩み事でも…」
どうやら、ジェリは役者の吉崎を知らないで、話し掛けているようだ。
「いや、なんでもないよ…。ていうか、君なんなの…」
なんで、見も知らない少女が話し掛けてきたのかを聞いた。今の世の中、物騒なので、吉崎は警戒した。
「ああ、実は、私、借金の保証人を探してまして、たまたま、いい具合に人の良さそうな貴方に保証人をやってもらおうかと…」
とんでもないことを、口走る彼女に吉崎は鼻水を吹き出した。
「なに言ってるだ、君は！！」
知らない人の保証人になんぞ、なれない彼は激怒した。
ジェリはカバンから、書類を出した…。
「名前を書いて、判子押してくれればいいだけですよ」

「嫌だよ！ていうか、友達にでも頼めよ！！」
そう吉崎が言うと…。

「友達なんか、いませんわ」

平然と、ジェリは言った。
吉崎の口が止まった。
「そんなことより、保証人になってくださいな」
ジェリは吉崎の顔に、書類を押しつけた。
「君、友達が居ないって…」
書類を顔に押しつけられながら、吉崎は喋る。
「私、親からも、ほぼ見捨てられてますわ。それより、判子を」
「君、そんなんで孤独とか感じないの…」
吉崎は、『君、寂しくないの？』と言いたかったが、なぜか、孤独の方が口に出た。あと、顔に押しつけられる書類が、彼の呼吸を困難にさせる。
「人は所詮、他人の心なんて、１００パーセントも理解出来ませんわ。人は自分の汚い所を、他人に隠してしまうのだから、本当に心が通じ合う友達や家族なんて居ませんわ。そんなの片腹痛いですわ。人間なんて、皆、孤独ですわ」
吉崎の体に、言葉では表現出来ない彼女の唯我独尊ぶりに稲妻が走った。
そして、顔に押しつけられる書類を、手で破り捨て、吉崎は駆け足で逃げた。
片手にあった飲みかけのコーヒーが飛び散っていた。

翌日のスタジオでの収録…。
断崖絶壁に立ち、吉崎ことエビフライ伯爵は、カケラレンジャーを見下しながら言う。

「所詮、この世は嘘で塗り固められた芝居だらけ！他人を理解するなんざ、出来るわきゃねぇんだよ！！くくっ、あっひゃっはははははははははは！！！！」

と、暴走したテンションで吉崎はエビフライ伯爵の演技をする。

そのすざましい演技に、監督が唸る。額には、汗が流れていた。

「どうやら、エビフライ伯爵としての、なにかを見つけたようだな…」

監督は眼鏡を外して、汗を手で拭いた。

収録終了後、吉崎はエビフライ伯爵のマスクを脱ぎ、家族に電話をした。

「ああ、もしもし…。今日は、帰りは早くなりそう…。うん、帰りに、美味しいエビフライでも買ってくるよ…」

吉崎は、先日のジェリの言い分から見つけた、気付いてないだけで、誰もが、心のどこかに、孤独を抱えている。

その見えない孤独こそが、エビフライ伯爵としての彼だ。

だけど、吉崎孝則としての彼は『本当に心が通じ合う家族』になれるように、努力する２７歳の男だ。

「ははは！うん…、なんたって、パパは、エビフライ伯爵だからね」

『世界中を壊しても、砕けないほどの愛が』（後書き）

越島ジェリの人格その３　ノーマル（ゴスロリ系）・ジェリ：基本人格。天上天下唯我独尊。どこか、ズレている。　彼女のモデルと名前の由来は、あえて名前は伏せますが、作者が好きな音楽ユニットのボーカルの女性。そのユニットは、ジャンルがよく変わるため、ボーカルの女性は、その時のジャンルや、雰囲気に合わせて、ファッションが次々に変わり、まるで別人のように姿が変わることから、ジェリの多重人格キャラを作りました。

『桜舞う季節は、別れもあるけれどね、新しい出会いが花びらの中に隠れてる

『実験小説！オシャレ・ライダーｖｅｒ２』
いきなりですが、今回は料理バトルです。何故、いきなり料理なのかは、たまたま、テレビつけたら、料理バトルやってたからです。
あと、いちいち登場人物を考えるのが難儀なので、前回と同様、過去作のキャラを使わせて頂きます。

２００８年２月某日。
この日は、Ｓ県Ｋ市は戦場と化す。
今日のため、市内体育館を貸し切り、腕に覚えのある強者が集う。スタジアムと化した体育館には、所狭しと、様々な器材や、材料が用意されていた。多くの観客がアリーナで、これから始まるこの戦いの行方を見守っていた。
そう、この四年に一度の料理バトルを…。
出場者は、選ばれし腕利きの料理人たち。果たして、その手に優勝を掴むのは…。

「さぁ、皆さん、お待たせいたしました。四年に一度の祭典、『料理による武力介入こと、反逆の料理祭り』も、いよいよ決勝戦です…」
いきなりだが、もうクライマックスだ。
そんなクライマックスな状況を、スタジアムの中心から、司会者のゼファーナ・春日が、アリーナで固唾を飲む観客たちに告げる。
そして、司会者は右手を挙げた。右手の先には、キッチンに立つ、決勝戦まで生き残った勝者が居た。

「まずは、ファイナリスト、地獄のなんでも屋に居座るフリーター少女、レビン・ハチコ！」
司会者に紹介されると同時に、スポットが一人の少女を照らす。
大きな歓声が響き渡り、その声に、彼女は大きく手を振って答える。
「えーっ、彼女は、卵かけご飯と、とろろかけご飯、納豆かけご飯などと、いろんなものをご飯にかけることを武器に勝ち上がった強者です。さて、レビン・ハチコさん、自信のほどは？」
と、司会者が彼女に、インタビューする。
「えーと、なんで、あたし、簡単なご飯だけで、生き残ってるんです…」
「はい、続きまして！」
会話の広がりそうにない彼女のコメントを切り捨て、今度は左手を挙げた。
司会者の左の手の先にあるキッチン。
そこに立つのは、我らが、越島ジェリ。
今回は、着物に割烹着を着ており、髪の毛を上品にリボンでまとめ、どこか、江戸時代あたりの日本人女性の姿であった。

説明しよう！
越島ジェリは、着物を着ることにより、純和風のおしとやかで、煌びやかで、和やかなハイカラ京都美人になるのだ！！
そして、ジェリは、この料理が得意なハイカラ京都美人の人格を使い、ここまで勝ち上がったのだ。

「そして、対するファイナリストは、料理界の壬生の狼こと、フリーター、越島ジェリ！！ていうか、この作者の作品、働かない奴、多っ！！」
と、司会者がジェリを紹介した。
遠くから、同じくファイナリストでフリーターのレビンが彼女を

見つめ…。
（あたしより、美人やんけ…）
と、思っていた。
「はい、では、越島さん、なにか一言…」
司会者が、スポットの当たったジェリにインタビューを求めると…。
「別に…」
「あっ、はい…」
司会者を、切り捨てるように答えた。
ハイカラ・ジェリは限りなく、沢〇なのだ。
たぶん、ジェリの人格でコミュニケーション能力が高い人格はない。
司会者は仕切り直し、今度は審査員席に手を向けた。
「そして、このたぶん、歴史に残りそうにない対決の審査をするのは、この7人だ！」
と、スポットが審査員席に当たる。
「左から、『俺の料理は、クライマックスだ』でお馴染み、腿太郎さん。『僕に食べられてみる』でお馴染み、裏太郎さん。『俺の料理は、泣けるでぇ』でお馴染み、シャドー月さん。『不味いけどいい？答えは聞いてない』でお馴染み、琉太郎さん。『狙い撃つぜ！』でお馴染み、ジーク東郷。『仙道なら、なんとかしてくれる』でお馴染み、ヤザン・デ・ネブ。そして、最後は『地獄のなんでも屋、フリーナイン』で馴染みのない、焼野原九乃助さん！以上の七人が、審査員です！！」
と、司会者が読み上げた。
審査員である、焼野原九乃助は、こう思っていた。
（なんか、俺だけ、浮いてる…）

ご飯の上に、いろいろかけるレビン・ハチコ。

料理の腕は良いけど、性格に問題のある越島ジェリ。
この二人の対決に、会場の熱気はピークに達していた。
そして、司会者が大きく腕を上げ…。
「いよいよ、ゴングの時間です！！」
と大きく叫び、料理対決の開始を告げた。
果たして、勝利の行方は！？

次回に続く。

『桜舞う季節は、別れもあるけれどね、新しい出会いが花びらの中に隠れてる

越島ジェリの人格その４　ハイカラ・ジェリ：性格、おしとやかな純和風の京都美人だが、インタビューされるのが嫌い。全人格中、唯一、人並みのことが出来る。

『桜舞う季節は、別れもあるけれどね、新しい出会いが花びらの中に隠れてる

『料理による武力介入こと、反逆の料理祭り』も、いよいよクライマックス。

数ある猛者を薙ぎ倒し、生き残った二人の料理人。

ご飯の上に、いろいろかけることに定評のあるフリーター少女、レビン・ハチコ。好きな食べ物は、パン。特技、ご飯を炊くこと。

多重人格を武器に勝ち上がった、今作の主役であり、人として軸がブレている少女、越島ジェリ（人格は、京都美人）。好きな食べ物は、日本で生まれた料理なのに洋食のオムライス。特技は、中〇製品と、国産を見た目で見分けること。

今、激しく二人の料理が、火花を散らす。

場面は、スタジアム内。　マイクを握る司会者のゼファーナ・春日は、決勝戦のテーマを公表しようとしていた。

「決勝戦の料理のテーマは、魚だ！！」

司会者はスタジアムにある食材の中から、一つの鯖を片手に叫んだ。

それに答えるように、アリーナ席からの観客が盛り上がり、様々な声が上がった。

「うぉー！魚料理かよ！」

「魚といえば、焼き魚、煮魚、刺身など、様々な種類があるぜ！」

「ここ、日本は魚料理においては、世界の頂点に立つ国！まさに、決勝戦にふさわしいぜ！！」

なぜか、観客たちが説明口調で盛り上がっていた。

だが、魚と聞いて、レビンは複雑な表情をした。

そう彼女が、今まで作ってきたのは、とりあえず、簡単にご飯にかけて食べるものばかり。

それ故に、手の込んだ料理など作れない。魚の調理などしたことのない彼女にとって、今回のテーマは難儀だった。
（しまった…）
そんな彼女の様子を、遠くのキッチンから見つめる、ハイカラ・ジェリ。口元には、冷たい笑みが漏れている。
（残念だったな…。レビン・ハチコ…。貴様などに、魚の調理は出来やしないさ…。しかも、私は魚料理は大得意。この勝負は、もらった…）
と、冷ややかな目線を、ジェリはレビンに送る。

カーン！！

レビンの戸惑いを無視し、非情なゴングが鳴り響いた。
制限時間は限られているため、駆け足で二人は、食材を取りに走る。
レビンは、なにを作るべきか悩みながら、手当たり次第に魚を選ぶ。
そんな彼女と反して、ジェリは、テキパキと狙いを定めた食材を手に取る。
「さぁー、始まりましたねー。ちなみに、実況は司会のワタクシ、ゼファーナ・春日と、解説者は、灰汁料理学校講師、黒鮪黒陰（くろまぐろくろかげ）先生です。よろしくお願いしますー」
「よっ、よろしく…、お願いします…」
と、実況がスタジアム内に響く。
「ところで、黒鮪先生は、料理番組をなさっているそうで」
「はい…」
「先生の料理番組、深夜にある画面の砂嵐よりは、面白いですよね」
と、実況席が戯れている間に、ジェリはフグを取り、キッチンで調理を始めた。

「おおーっ！と、越島ジェリ選手は、高級食材である、フグを捌いております！もし、あれがサバだったら、サバをさばくと、黒鮪先生の料理番組より、下らない駄洒落を言うところでした！！」
手慣れた包丁捌きで、ジェリは綺麗にフグを捌く。
彼女はフグ刺しを作ろうとしているのだ。
関係ないが、フグ刺しを『てっさ』と呼ぶのだが、その単語で、インターネットの画面検索すると、なんで、あんな検索結果になるのだろう。
一方のレビンは…。
「あーっ！と、レビン選手は、魚を捌くどころか、ご飯を炊き始めたぞ！」
なぜか、彼女は普通に米を炊き始めた。ただの白米を。なんもせずに。
「一体、彼女は、なにを作ろうとしているのだろうか！ええーい、今宵は、料理のエロスタイムだぜ！」
と、司会者が一人で盛り上がっていた。
その横で、解説者の黒鮪黒陰は、ＤＳの脳トレをやっている。

二人は、様々な調理法で、料理を完成させていき、ついに、制限時間終了の合図が鳴り響く。
ついに、決勝戦の料理は完成した。

「さて、ついに最強の料理人を決する時となりました！」
完成した二人の料理は、審査員席に送られた。

まずは、ジェリの料理。
見事な包丁捌きで作られ、見た目も鮮やかなフグ刺しのフルコース。
この繊細かつ、美麗なフグ刺しは、審査員だけでなく、観客たち

まで魅了した。
「ひやっほー、美味そうだぜぃ！」
「もし、目の前に、芸能人のガッキーと、あのフグ刺しがあって、どっちか、選べと言われたら、間違いなく、ガッキーを選ぶぜ！」
と、異常なまでに観客のテーションが上がっていた。

一方のレビンの料理には審査員たち、みな戸惑っていた。
彼女の料理は、やはり、ご飯の上になにかが、かかっているだけであった。
審査員の一人である、焼野原九乃助は、長い付き合いであるレビンが作った料理が、なんなのかを見抜いた。
「げげぇーっ、これは、ただの煮干しかけご飯だ！しかも、これは、なんの特徴もない市販の煮干しを、新潟県産の米を、ただの炊飯ジャーで炊いただけのご飯に乗せただけだ！！」
あまりに悲惨な周囲の反応を気遣ってか、彼は無理にテーションを上げて言う。
しかし、虚しくも、空回るだけだった。
しかも、新潟県産ではなく、新潟県の上の県、山形県産の米だった。
もう、悲しいくらいに勝敗は見え透いていた。
「この勝負は、うちの勝利やね…。色なし、フリーターの小娘ちゃん…」
京都弁の色っぽい喋り方で、ジェリはレビンを嘲笑う。
そう言われ、レビンは…。
「あんたも、フリーターだろが…」
そして、運命の審査員の実食による審査が始まった。

数分後…。

ピーポ、ピーポ

スタジアム内に、担架を持った救急隊員たちの姿が…。
担架で運ばれて行くのは、青ざめた顔をした審査員たち。
「九乃助さん！死なないで！！」
泡を吹いて、白目を向いて、担架に運ばれて行く、九乃助。レビンは、彼の手を泣きながら握る。
そして、その脇には、警官から手錠をかけられたハイカラ・ジェリ…。
一体、なにが起きたのか…。

司会のゼファーナ・春日が現状報告をした。
「えー、大変永らく、お待たせしました…。たった、今、起きた現状を説明と致します…」
静まり返った会場に、司会の声が響く。
「越島ジェリ選手は、調理師免許を持ってなく、フグを調理し、しかも、フグの毒を取り除いてなかったため、それを食べた審査員方が…」
こうして、決勝戦は勝者なき虚しい結果となった…。

越島ジェリは、また逮捕されたとさ…。
みんなも、資格、ライセンスなしに、フグを捌くなよ！

「恋をするっていうのとは、ちょっと違うけど、割りとドキドキした」（前書き

今回のテーマは、『デジャブ』…。

「恋をするっていうのとは、ちょっと違うけど、割りとドキドキした」

西暦２００８年の3月の昼下がり…。
今、また再び、オシャレに命をかけたつもりでいる暇な人々の激しく切ない戦いが始まる…。

（この作品は、一切、コピー機能を使用していません）

ここは、S県にある『キャンディーキューティー刑務所』…。
その殺風景な出口から出て、刑務所内で世話になった看取たちに、挨拶をして、出所する一人の少女がいた…。
彼女の名は、越島ジェリ（無職、前科2件あり）。オシャレに命を預け、この資格社会の中で、普通二輪免許と調理士免許を持ってなかったが故に、悲しい運命（自業自得）を辿った少女である。
刑務所内で着れなかった、お気に入りの白のゴスロリファッションに、着替え、ウキウキ気分で彼女は街を歩く。
「昔の過ちは忘れて…、これからを楽しく生きていくわ！」
と、前向きに決意を新たにした瞬間！！
彼女の周りで、いきなりにもほどがあるだろう！的なまでの事件が発生した！！

バァーーン！！！

「きゃあ！！」
裂くような強烈な銃声の音が、彼女の耳に入り込む。
なにがあったのだ！？と、彼女の目線は、銃声が鳴った先に走る。
目線の先には、コンビニがあった。どうやら、銃声が鳴ったのは、このコンビニのようだ。
「一体、なにが…」

彼女の脳裏に、嫌な想像が沸く…。
（なんか、何回も同じことしてるような…）

（この作品は、一切、コピー機能を使用していません）

彼女は野次馬と、パトカーが囲む現場近くに駆け寄った。
そして、その一部始終を知るべく、たまたま近くに居た、野次馬の青年、黒鮪黒陰（某料理学校講師、生まれた暦と、彼女どころか、友達居ない暦が同じ）に話し掛けた。
「そこの、微妙に、登場回数が多い人！」
「ひっ！」
と、普通な話し掛け方を彼女はした。
「一体、なにが起きたですか…？」
「この２４時間営業のコンビニエンスストアー、『チェンジ・キックホッパー・パンチホッパー』に、本物の銃を持った強盗が…」
ジェリは、自分の顔に手を当てた。
「へぇ…」
もう彼女は、あまり驚かなくなっていた。
すると、黒鮪黒陰が更に説明をする。
「強盗の名前は、オシャレ大学卒業の『アッシュ・ライク・スノー・健彦』で、人質になっているのは、『チェンジ・キックホッパー・パンチホッパー』の店長、『クライマックスＢＯＹ・オレ・ヨウヤク・サンジョウ』です」
なんと、今回も、ジェリの憧れ（ていたのは、数ヵ月前まで）のオシャレ大学の卒業生による見るも恥ずかしい事件だったのだ。
手慣れた要所、要所を手短に黒鮪黒陰が説明をする。
「オシャレ大学、ブリタニア文化学部卒業の芸能人志望の真面目な青年で、芸能人になれなくて、やさぐれて、たまたま落ちていた拳銃を拾ったので、それで近くにあったコンビニで強盗をすることにした人ですよ…」

「へぇ…」
やる気なさそうに、ジェリは彼の話を聞き流す。
たぶん、優秀な日本の警察だから、すぐ彼は逮捕されるだろうと思って、ジェリは、その場から立ち去った。

（この作品は、コピー機能を使用して、話を再構成なんかしていません…）

（このような現象を、『デジャブ』と言います…）

銀行をあとにして、家路に向かう彼女は、のほほんと鼻歌を歌う。
「オシャレな街を、オシャレな服着て歩く、女の子～♪」
彼女が、歩いている道は桜の並木。
ちょうど、春になり始めた季節。
つぼみ達が、そろそろ、花を咲かせようと、桜色に染まろうとしていた。

「本当は、とっても自信がないから…、きっと、とってもツライ恋から覚えた、あの日の言葉のように…♪」

桜並木に溶け込んでいくように、彼女は、歩いて行く。
前へ、前へと足を進ませて行く。
暖かくなった日差しを感じながら、桜のつぼみの匂いを感じる。

「そうか、もうすぐ、春か…」

「恋をするっていうのとは、ちょっと違うけど、割りとドキドキした」（後書き

では、また次回作で、お会いしましょう…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6796d/

オシャレ・ライダー　ver2

2010年10月8日15時29分発行